

【鳥葬】

死体を野山などに放置し、鳥に食わせる葬法。ヒマラヤ周辺に現存。

延々と伸びた廊下に硬質な靴音が響き渡る。

等間隔に並ぶ窓の外には濃い暗闇が立ち込め、懐中電灯の丸い光がそれをくりぬく。

夏休みを控えた7月上旬。都立篠塚高校の用務員・杉下は、夜の校舎で見回りを行っていた。

「これでよし、と。あとは玄関を戸締りすりや終わりだな」生徒、ならびに教職員は既に帰宅している。現在校舎内に残っているのは杉下だけだ。

全く、自分はツイているな。

懐中電灯を下げて静まり返った廊下を歩きながら、杉下は苦笑する。昔から健康に恵まれて体は頑丈、還暦を過ぎてもまだまだ働ける。叶うことならもうすこし老後の資金を蓄えたい。

結婚三十周年の記念日に、旅行好きな妻を温泉に連れて行くというささやかな目標もある。

心配性な妻は「たくさん働いたんだからしばらくゆつくりすればいいのに」とぼやいていたが、自分の判断は間違っ

てないはずだ。

一方でひっかかることもあった。先日面接に来た際、校長に言われた話だ。

それは特別荒れているわけでもない……在校生の学力にせよ治安にせよ極めて平均的な篠塚高校において、用務員の入れ替わりが非常に激しい原因だった。

前任者は半年もたなかつたと聞いている。最後の方は心を病んで辞めてしまったのだとか。

「まさかな」

馬鹿げた話だ。到底信じられない怪談。前任者にした所で影か何かを見間違えたに決まってる。

心の中で嘲笑い、行く手を懐中電灯で照らしてぎよつとした。廊下に黒い羽根が落ちている。

「カラス……か？ どこから紛れ込んだんだ、窓は全部閉めたのに」

突如として目の前に現れた漆黒の羽を拾い上げ、注意深くひねくり回す。

廊下の真ん中に立ち尽くし、気味悪そうに窓の向こうを一瞥する。

この高校は小高い丘の頂上に立っており、眼下には市街地の光が広がっていた。

当然、夜10時を過ぎた今の時間になだらかな坂道を上って

くる物好きはいない。

しかし、飛んでくる物好きはいた。

最初の違和感は黒より黒い影だ。窓を隔てた遙か先の夜空を、何かが凄まじい勢いで滑ってくる。不審に思い目を凝らす杉下の耳を、衝撃でガラスが撓む轟音が聳した。

「なんだ!？」

轟音に次ぐ轟音、連鎖的に打ち震える窓ガラス。それが黒い影の洗礼だと気付いたのは、実際に激突の瞬間を目の当たりにしてから。

バンツッ!　ぐぎやあ!　バンツッ!　ぐぎやあ!　夜闇を突つ切り滑空し、窓ガラスに体当たりする鳥の群れ。闇よりなお濃い黒い羽根が飛び散り、濁った断末魔が上がっていく。杉下は以前妻と見た映画を思い出す。アメリカの映画監督が撮った古いスリラー映画で、鳥の群れが人間に襲撃を仕掛ける話だ。今の状況とよく似ていた。

「ひっ!」

懐中電灯を振り向けた先の窓で、翼を広げたガラスが潰れる。首が変な方向を向いていた。一体全体なんでコイツらは自分から?　理解不能な事態に心底恐怖し、震える手から懐中電灯を取り落とす。廊下をころころ転がる懐中電灯が天井を暴いて床を照らす。

「え……」

杉下は、見た。漸く停止した懐中電灯の先、丸く切り抜かれた空間に異様な鳥居があった。

何故校舎の中に鳥居が?　ありえない。こんな物さつきまでなかったじゃないか。

完全に腰を抜かした杉下の眼前、廊下のだ真ん中を塞いだ鳥居の中心が歪んで渦を巻く。

ぐぎやあぐぎやあぐぎやあ、夥しいガラスの群れが鳴き騒ぐ。分厚い窓ガラスを隔ててもこんなうるさいなんて……否。

ガラスの鳴き声は鳥居の中心、渦の中心から無限に湧き上がっていた。

俺が学校一の問題児・茶倉^{ちやくらん}と関わることになったのは、俺自身の厄介な体質が原因だ。

きっかけは夏休み少し前。ダチと東京に遊びに行った夜、生まれて初めて金縛りを体験した。

体が動かせないのには最初あせったが、一晩中固まつてただけでやり過ごせるなら楽勝じゃん和高を括っていた。

その余裕が消し飛んだのは部屋に真っ黒な影が現れ、ベッドで寝てる俺にのしかかってきた時。

一目見た瞬間、脳裏にけたままし警鐘が鳴り響いた。ア

レは邪気のかたまりだった。

ベッドの足元に現れた影の輪郭は不気味に伸び縮み歪んでいた。不可視の手が捏ね回して作り上げた人もどきに見えた。

お願いやめろくるなこないであっちいけ。

目を瞑り必死に祈る俺を嘲笑うかのように、その人もどきは近付いてきた。

何かとんでもなくおぞましく恐ろしいものが接近してくるのにまるで抵抗できず、焦燥感と絶望感が募り行く。

やめろくるなこっちくるなやめろやめろお願いこないで許してください助けて。

どんなに強く念じてでも無駄だった。誰も助けにきちやくれない。隣室で寝てる両親や姉貴に心の声は届かず、大柄な影に組み敷かれる。

思い出したくもないが、俺はその夜レイプされた。なんだかよくわからないばかりの……一般の人たちが悪霊とか呼ぶ、得体の知れない存在に。もちろん痛かった。しかしそれ以上にこたえたのは体を内側から穢されてく感覚、魂を毒されるような不快感だ。

身も心も不浄な存在に堕とされ、内側から作り替えられてく違和感は言葉で説明しにくい。

「あつあ、ああつ、んううつあ、あつ」

思えばアレは俺が生まれて初めて直面した、抗いようのない理不尽だった。

この残酷な世の中には非力でちっぽけな人間がどうがんばってもどうにもならないことがある。

どんなにあがいても絶望しかない。どん底から這い上がれない。

体の裏表を這い回る手の感触と尻をこじ開ける楔はまだセックスを知らない俺をうちのめすのに十分で、最後の方は泣きながら命乞いしていた。

「許してつ、あうつ、ごめんなさつ、ああつ、うぐ、ひぐつ」家族や先生、ダチには相談できない。そもそなんて言えればいい？ 夜毎悪霊に凌辱されてる？ じゃなんで朝起きたら下着がべと付いてるんだ、悪霊に突っ込まれて夢精してりや世話がない。

体の中には確かに何かが出入りしていた感覚があった。体内の粘膜がこそぎ落とされていったような、奇妙な喪失感と空虚感。でも血は出てないしズボンに脱げてない。

虚実の境が曖昧になる。どこまでが現実で夢か線引きを見失い、自分すら信用できなくなる。

誰かに打ち明けても頭がおかしくなったんじゃないかって疑われるのがオチ、それ以前に内容がセンシティブすぎる。

「ケツいてエ……」

まだ朝五時前、家族は誰も起き出してない。

ヒンヤリ冷えた静かな家をひたひた歩き、鈍く疼く下半身をひきずって洗面所へ行く。夢精で汚したパンツを手洗いしてると無性に泣けてきた。

手の甲で涙を拭いて鏡を見ると、一瞬だけ肩越しに黒い影をとらえてぎよつとした。次いで視線を下ろし、手首に生じた痛々しい痣に気付いて戦慄が駆け抜ける。

毎日が比喩じゃなく生き地獄だった。そのうち悪霊は増長し、昼でも夜でも構わず俺を侵し始めた。家にいる時も授業中も心が休まる時間は片時もなく奪められた。

茶倉は俺の地獄に終止符を打った。

第一印象はぶっちゃけ最悪。誰が男子トイレの個室の天井からコンニチハしたデバガメ野郎に好感をもてるだろうか。俺の喘ぎ声がうるさかったのは別にして、だ。

「あつ、ンあつ、ふあああつ、や、止まんねつ、ああつ」

「気持ちええ？」

「ッ!？」

その日も俺は授業をサポートしてオナつていた。

待て、軽蔑しないでくれ。コレは仕方ない、緊急措置ってヤツだ。先生にあてられ板書中に例のアレがきて、慌ててトイレの個室に引っ込んだんだ。

ふやけきった口の端から涎を垂れ流し、大股開きで卒おつ勃てた俺を、同じ制服の男子生徒が冷めた目で見下ろしていた。

「おまつ、なん、授業中」

その時は名前も知らなかった。ただ顔にはぼんやり見覚えがある、同じクラスの気になる女子がかっこいいと噂していた。

確かに顔立ちは整っているが、片方だけ上がった口角にひん曲がった性根が滲みだし、とてもじゃないが好きになれそうにない。

オナニー現場を目撃されたショックで絶句する俺に対し、男子生徒は右手に預けた煙草をちよいと掲げる。左手首には黒い光沢が綺麗な数珠を巻いていた。珍しいアクセ。

「なんやえらいエロい声するなー、思て覗いてみたら」

関西弁に面食らったが、こっちはそれどころじゃない。授業を抜け出してトイレの個室で自慰に耽つてたなんて、もしバラされたら学校生活が終わる。このタイルに土下座して口止めを……

「頼む他のヤツには黙っててくれ!」

「お前が男子トイレで股おつびろげてオナニー狂つてると?」

個室の仕切りにぶらさがったまま、ばつさり切り捨てる男

子生徒。完璧面白がつてやがる、憎つたらしいツラをぶん殴りてえ。

埒が明かないと判断、同情を引く作戦に切り替える。学ランをはだけたまま便器から身を乗り出し、潤んだ目で弁解する。

「俺っ、の、体おかしいんだ……ホントはホントにこんな事したくねえのに、こないだから毎晩金縛りにあつて、変な夢見まくつて……」

「どんな夢？」

ふいに真顔になる。目はもう笑つてないし、茶化す雰囲気も引つ込んでいた。澄んだ虹彩に魅入られ、何故かするりと言葉が滑り出た。

「夜になるたびでつかい影がやつてきて、その、俺のカラーで色々するんだよ……されてる最中に変な映像も見える、別の部屋の。ラブホみてえな」

「巻いとけ。ちよつとはマシになるで」

「待つ」

個室の床に無造作に投げ込まれた数珠をとる。ドアを開けたら既に消えていた。神出鬼没だ。

「変なヤツ。数珠つて……なんでイマドキの高校生が持ち歩いてんだ」

ブツクサ呟いてとりあえず右手に通す。結構おしやれだ。

気休め程度にはなるかもしれない。

結論から述べるとそれ以上の効果があった。右手に数珠を巻いた直後から嘘みたいに性欲は収まり、悪霊が現れなくなったのだ。

そういうわけで、俺は安眠を取り戻した。この日から悪霊の夜這いに怯えず熟睡できるようになり、体力と気力がすっかり回復する。

「烏丸ー、それ何？」

「数珠」

「いや見りやわかるし……なんでガツコに数珠巻いて来てるの？」

「じいちゃんの形見なんだ」

ごめん京都で健在のじいちゃん。しかしこういつとけばダチも深くは突つまず、「形見ならアリだな」と流してくれる。

数珠サマサマの爽やかな朝を迎えて一階へ下りてくと、エプロン掛けたお袋が朝飯の支度をしていた。二個上の姉貴は既にテーブルに着き、目玉焼きを食つてる。

「おはよ」

「はいおはよ」

俺の分の朝飯を持ってきたお袋が、右手に視線を落として目を丸くする。

「それ数珠？　うちのじゃないわよね」

椅子を引いて腰を下ろす途中、鋭い指摘にぎくりとする。

「雑誌の広告に載ってたモテ力アップのパワーストーンじゃない？　理一ってホントばかだねー、そんなのしたって中身磨かなきゃ彼女できないのに」

「るっせえメスゴリラ、大胸筋でドラミングしてろ」

無愛想な憎まれ口を叩きながら、心の中では助け舟をだしてくれた姉貴に感謝した。

こんな感じで周囲に多少訝しまれながらも、平穏な日常に復帰できたのはめでたい。手首の痣も今じゃ殆ど薄れて気にならない。

……とはいえ、ちやつかり借りパクは後ろめたい。

アイツ……謎の男子生徒には「巻いとけ」と言われたか、やるとも貸すとも言われてないんじゃないの？　後、どうしたらいいか困る。

この数珠を身に付けてる限り悪霊は寄ってこない。おそらく魔除けの力が宿ってる。

ってことは、結構な高級品なんじゃ？　見た目も綺麗だし。登校中バスの吊り革を掴んでる時や授業中ノートをとってる時に自然と目が入り、その都度名前を聞きそびれたアイツの顔がチラ付く。

二限目の日本史の授業中、立てた教科書に隠してスマホを

操作。値段を調べてみた所一本ン万円のがヒットして驚く。「嘘だろ、こんなにすんの？　うまい棒箱買いできるじゃん」

せいぜいドンキで五百円とかだと思ってたのに……。

「やつぱり借りパクは駄目だよな、人として。うん」

夜、半ば風呂に沈んでぶくぶく泡を吹く。俺が現在日常生活を送ってるのは、アイツがよこした数珠を肌身離さず付けてるおかげ。なのにまだちゃんと礼も言えてねえ。ていうか、誰よ？

『なんやえらいエロい声するなー、思て覗いてみたら』
「~~~~~」

派手な水しぶきが上がる。個室の一件がぶり返し、耳まで赤くなった顔をお湯に突っ込む。

人生最大の生き恥さらした張本人に、今さらどのツラ下げて会いに行けって？

荒っぽく顔を洗い、ふと手をどけた瞬間に数珠の濁りに気付いた。汚れと勘違いし、お湯に浸けて擦ってみたもののちつともとれない。

「昨日まではなかったのに」

嫌な予感に駆られて独りごちる。借り物の数珠を眺めるうちに心が決まり、やつぱり会いに行くことにした。

「茶倉くん？ 知ってるよー、有名人だもん」

「そうなのか」

デバガメ関西人こと茶倉錬は隣のクラスの生徒だった。この学校で関西弁を喋るのは一人しかいないって事で、思いのほかあっさり割れた。

たまたま応対にでた1年2組の女生徒が、意味深な目配せを交わし合い喋り出す。

「てか烏丸、無知すぎてウケるんですけど？ うちのガツコで茶倉くん知らないとかモグリじゃん」

「意味わからんし」

昼休みの校内は解放感があふれていた。廊下じゃ男子が大騒ぎし、至る所で女子グループが姦しくお喋りしてる。肝心の茶倉は教室に不在らしく、俺と同中のギャルが代わって教えてくれた。

「本名は茶倉錬っての、変な名前っしょ。関西弁はキャラ作りじゃなくて元々らしいよー、小5でこっち越してきたとか」

ギャル曰く、茶倉は極め付けの変人で教室どころか学校中で浮きまくってるんだそうだ。

「群れるの好きじゃないみたいで基本お一人様行動だし、授業もサボりまくり」

「不良なの？」

「どっちかっていうと優等生かなー。頭はすごいいいよ、学年十位以内から落ちた事ない」

「ふへー」

「あとルックスね。すごい美形でしょ？ ヤバイ」

「ボキャブラリーが貧困だな」

「入学からこっち十人以上の女子が告って玉砕してるとかなんとか。そーそー茶倉くんのファンはチャクラって呼ばれてんの、これ豆知識ね」

「今すぐ返却したいトリビアだな」

まるで役に立たねえ。内心うんざりする俺をよそに、ギャルの背後から別の生徒がやってくる。

「なにになに茶倉の話？ ってかこの人だれ、別のクラスのヤツ？」

「あー、ちよつと用があつて……前に借りたもの返したいんだ」

言葉を濁して説明する俺に、茶倉のクラスメイトが興味津々群がってくる。

「茶倉は？ いない？」

「いなーい」

「またー？ 昼休みになるとすぐフラツと消えちゃうんだよね、そーゆーミステリアスなトコもそそるんだけど」

「マジで言ってるのかよ、喋りかけてもシカトすっしすげー
感じ悪いじゃん」

「男の嫉妬は醜いぞー」

「ウチもカラオケ誘ったら断られた。クラスでパスしたの
茶倉だけ」

「あれからなくんか近寄りがたくなつちやつて遠巻きにし
てるよね、浮きまくり」

俺の存在をド忘れして盛り上がる2組の連中の一人、茶髪
のチャラ男が口を開く。

「そーいや茶倉んち、ヤバイ神様拜んでんだ」

「ヤバイ神様？ 新興宗教か？」

声を潜めて聞き返す。

チャラ男とギャルが顔を見合わず。

「私も聞いたことある、茶倉くんのおばあちゃんて結構有
名な拝み屋？ なんだつて。でね、家に変な神様祀ってん
の。名前はたしかきゅー……キユーピー？」

「マヨネーズ？」

場を和ませようとかましたボケをあつさりスルーし、お前
らデキてんのかよと突っ込みたくなる距離感のギャルとチャ
ラ男が余計なお世話を焼く。

「烏丸も関わらない方がよくない？ あたしらとはさー住
む世界違うかんじ。見下してる？ っていうか？」

「色々変な噂あるもんなく、鳥の死骸集めて黒魔術の材料
にしているとか」

「知ってる、3組の子がカラス持つて校舎裏歩いてくの見
たんてでしょ？ 悪魔に生贄捧げてんのかな、茶倉くんなら
やりかねないよね」

「うちの親なんかアイツのばあちゃんのこと詐欺師呼ばわ
りで毛嫌いしてる」

「情報提供サンキュ、もういくわ」

本人がいねえ所で悪口を聞かされんのは嫌な気分だ。

クラスメイトの詮索で盛り上がる連中のもとを去る間際――

「きやあつ！」

凄まじい轟音と共に、廊下の窓ガラスに黒いかたまりが激
突した。

たった今まで陰口を叩いてたギャルが鋭い悲鳴を上げてあ
とずさり、チャラ男が立ち尽くす。

「カラスだ」

「また自殺？」

「最近多いよね、気味悪い……」

ガラス越しに飛び散る大量の羽と潰れてひしゃげた体。生
命の鼓動が消えた、無機質な黒い目に息を呑む。

窓ガラスに体当たりしてずり落ちていくカラスを見送り、
そそくさ退散する。

実の所、うちの高校は鳥の衝突事故がめちやくちや多いこととで知られている。授業中に窓ガラスに突っ込んでくるのは日常茶飯事だ。窓に全身を打ち付けた鳥は、大抵の場合首を折って即死する。

付いたあだ名が鳥葬学園。墜落した鳥の死骸は先生たちが処分して貰うらしいが、詳しくは知らない。

鳥の自殺の瞬間を見ちまつたせいか、胸がまだドキドキしてる。屋上、踊り場、図書室、食堂……もうすぐ昼休みが終わるつてのに茶倉は見付からない。

「職員室……はねエよな？ 帰宅部って話だから、体育館で昼練の線も薄いかな」

体育館に続く渡り廊下を歩きながら、ため息を零して数珠をいじる。

やけに重たく感じるのは茶倉の祖母に纏わる噂を知ちまつたから？ 気のせいかな、昨夜よりさらに黒ずんでいるようだ。

……まあ、そっち系の予想はしてた。じやなきや数珠にご利益が宿る根拠が薄い。昼休みの教室にいないのも、家の事情で孤立してるせいじやないのかよと気を回す。

「キューピー人形がご神体ってどんな宗教だよ。信者全員マヨラーのキューピーマヨネーズ教？ たこ焼きにマヨかけなかつたら処される系？」

そろそろ切り上げるか。空振り続きに落ち込む俺の視線の先を、噂をすれば影な茶倉が横切って行つた。ラッキー。「ちやく」

咄嗟に呼び止めかけ、茶倉が片手にぶら下げたものにぎよつとする。折れた首をだらんとうなだれた、真つ黒なカラスの死骸。

「ら……？」

茶倉は俺に一切気付かず、すたすた校舎を回り込む。

我に返って尾行開始、安全な距離を保って追いかける。何アレ？ 本当に生贄？ 噂は事実だったのか？

昼休み終了を告げる予鈴が鳴り響く中、二十メートル先を進む少年の歩みに合わせてカラスの首が揺れる。

この高校は旧校舎と新校舎に分かれてる。

数年前に建てられたばかりの新校舎は清潔で綺麗だが、旧校舎は薄暗くてみすぼらしい。

付け加えるなら新校舎の面した中庭にはベンチが点在し、園芸部が手入れしてる花壇が四季折々の花を咲かせてるので、カッパルや友達同士で弁当食うのにもってこい。

対する旧校舎の方は至って殺風景。春以外は存在を忘れられてる桜が鬱蒼と生い茂り、ジメ付いて気が滅入る。

不穏な胸騒ぎと危険な好奇心に駆り立てられ、旧校舎を曲がる茶倉を追いかけた俺は、衝撃的な光景を目撃する。

カラスはまだ死んでない。首が折れても生きていた。茶倉は地面に片膝付いてカラスを横たえ、物憂げに一言呟く。続いて瀕死の痙攣を引き起こすカラスの首をねじり、どめをさす。

「つ……、」

耳の裏側で膨れ上がる心臓の音がうるさい。鼓膜を殴り付けられてるみたいだ。

コンクリが老朽化してあちこひびが入った旧校舎の裏は人けがなくて、俺と茶倉しかいなくて、涼しい日陰を投じる葉桜がざわめいていた。

あとずさった拍子に砂利を踏みにじり、胡乱そうに目を眇めた茶倉が振り向く。

「あの俺、こないだ借りた数珠返そうとおもって」

「男子トイレで股おっぴろげてオナつとった」

「1年1組出席番号6番烏丸理一だよ！」

勢い余って自己紹介に踏み切り、引き攣り気味の笑顔で茶倉の足をさす。

「それ何」

「カラスの死骸」

「見りやわかる。何してんだ、まだ生きてんのに……」

たまらず非難を口走る俺をそっけなく一瞥、茶倉が冷笑を浮かべて言った。

「どのみち助からん」

「だからって」

「ストーカーうざ。いね」

体ごと向き直った茶倉に追い立てられ、一気に血が逆流する。葉桜がざわざわ騒ぎ、生ぬるい風が吹き抜けていく。風に靡く黒髪をそのままに、旧校舎が差し掛ける巨大な影に溶け込み、拝み屋の孫が挑発的に微笑む。

「お前も呪ったるか？」

炯炯と輝く眼光に威圧され、次の瞬間その場から逃げ出していた。右手首の数珠がキツく食い込み、遠隔で罰されているような痛みを与える。

脳裏ではクラスメイトの陰口や噂がぐるぐる渦巻いて、心臓が早鐘を打っていた。

第一印象は最悪。セカンドコンタクトは輪をかけて。

この時茶髪の助言に従って素直に手を引いていれば、俺と茶倉がダチになる事はなかったかもしれない。

茶倉練はやべえヤツだ。

その後自分のクラスや他のクラスでも情報収集し、昼休みになるたび茶倉がせっせとカラスの死骸を集めている事実が確定する。しかも入学以来ずっとだそうだ。

「カラスの死骸なんかどうするんだろ、気味悪いよね」

「うちが鳥葬学園とか呼ばれたのも案外アイツのせいなんじゃねえの」

「剥製にして部屋に飾ってんのかな、悪趣味ー」

目撃者は大勢いた。他でもない俺もその一人で、近付くと直々に牽制されちまった。

『呪つたるか』

校舎裏で投げかけられた脅迫が、寝ても覚めても鼓膜にこびり付いて離れない。理性で判断したら、これにこりて近付かない方がいいに決まってる。

茶倉はヤバイ。絶対異常だ。

カラスの死骸を集めて何をしてるか知らないし知りたくもないが、もし本当に黒魔術の儀式に使ってんなら……

『茶倉んち、ヤバイ神様拜んでんだ』

『でね、家に変な神様祀ってんの。名前はたしかきゅー……キユーピー？ 烏丸も関わらない方がよくない？』

茶倉に絡んだら俺も呪いの対象にされる？ お断りだそんなの。けど待て、じゃあなんで助けたんだ？ 数珠なんて投げ込まずに無視すりやよかつたのに。俺なんか助けた所でメリットねえのに。

断言できるのは、茶倉練が俺の命の恩人ってことだけ。

カラスの死骸をぶら下げて歩く非常識な変人でも、アイツがくれた数珠のおかげでぐっすり眠れるようになったのは

事実で、義理を蔑ろにしちゃいけない。

『あたしらとはさー住む世界違うかんじ。見下してる？ つていうか？』

本当にそうか？

旧校舎の裏で再会を果たした茶倉は、何も恥じず怖じずまっすぐ見て来たじゃないか。

陰口に振り回されてよく知りもしねえで判断したら、俺も連中と同類になりさがる。

茶倉が拝み屋の孫で付き合い悪くてクラスで浮いてたって関係ない、俺はまだ全然アイツの事を知らない。

「……ビビってケツまくつたまんまじや癪だよな」

右手の数珠は日に日に黒く濁っていく。まるでカウントダウン。

翌日、学校が終わるのを待つて行動開始。即ち、尾行のりベンジに挑む。

今度は絶対失敗しないと誓い、下駄箱近くで待ち伏せるきた。

茶倉を追って正面玄関を出、校門を抜け、桜並木が植わったならかな坂道を下っていく。

金曜日の放課後ときて、周りの連中は寄り道の予定を打ち合わせてはしゃいでた。俺もマツクで腹ごしらえしないかダチに誘われたものの、丁重に辞退した。

茶倉はバス停でバスに乗り、最寄り駅から電車に乗る。下車したのは三駅離れた旧市街、そこからは徒歩で帰宅するみたいだ。

同じ学校のヤツはもう歩いてない。用件を切り出すなら今だ。よし……やっぱやめ。いざとなると尻込みし、ズボンの横で何度も手汗を拭く。

たつた一言、どうしてもそれが言えない。

心ん中じや繰り返し練習したのに……自分の意気地のなさが齒がゆくて、右手の数珠をしきりになぞる。

俺が優柔不断に悩んでる間も茶倉は歩調を落とさず、旧市街を通って一軒の屋敷の前に至る。

そこは平屋建ての立派な日本家屋で、塀の内側には見事な庭園が広がっていた。

「拝み屋って儲かるんだな」

電柱に隠れて感心する。茶倉は何故か門前にたたずんだまま、一向に入ろうとしない。「茶倉」と表札が掲げられてたんで、ここが家で間違いないはず。

唐突に茶倉が振り向く。ばれたと勘違いして慌てて引込む。間一髪セーフ。

電柱から顔だけ出して観察続行。茶倉は憂鬱そうに俯いていた。

トイレの個室で見せた愉快犯めいた笑顔や、旧校舎裏で対

峙した時のミステリアスなたたずまいとは打って変わって、弱々しい表情にドキリとする。

自分の家に入るのをためらっているような。敷居を跨ぐのに抵抗を感じている、ような。

「帰りたくない、のか？」

茶倉の背後に黒塗りの高級車がとまる。助手席のドアを開けて出てきたのは上等なスーツにおっさん。どうやら顔見知りらしく、茶倉と言葉を交わしているものの会話が聞きとれない。

おっさんはすこぶる上機嫌だが茶倉は露骨に迷惑がって、話を打ち切りたがっているようにも見えた。

「……で、君からもお祖母さんに……」

「わからん人ですね、俺は関係ないって言ったやないですか」

「後継ぎなら関係あるだろ？」

おっさんがニヤニヤ笑って茶倉の肩に手をかける。大して強く掴んだようには見えないにもかかわらず、大袈裟に顔をしかめる茶倉。

体が勝手に動いた。

「うわっすっげー、茶倉んちってでっかいんだな！」

「え？」

突然飛び入りしたガキに目を丸くするおっさん。すかさず

茶倉の腕を引つ張り、マシガントークで畳みかける。

「てか遅えよお前、何ぐずぐずしてんだ。駅前のカラオケに集合つて言つたの聞いてなかった？ 待つてんのだるいから迎えに来ちまった」

「待ちなさい、まだ話は終わつてな」

「茶倉の知り合いですか？ 俺コイツのダチの鳥丸つています、悪いけどこちが先約なんで連れてきますね、じゃー！」

「走れ」と囁いて同時に駆けだす。旧市街を走り抜けて駅前に戻り、膝に手を付いて呼吸を整える。茶倉は息も切らしてない。

「やつぱツケとつたんお前か。気配でバレバレ」

「うる、せえ、はあつ、はあつ」

顎に滴る汗を拭つて毒突く。茶倉はあきれ果てた様子。

「ダチとかカラオケとか聞いてへんけど」

「嘘も方便。変なオツサンに絡まれて困つてたじゃんか」

「余計なことして恩着せんなストーカー」

「〜かつわいくねえ！」

「おおきに。で、なんでうちに？」

「まだ言つてなかったから。数珠、貸してくれてサンキョ。おかげさんで幽霊出なくなった」

茶倉がぼかんとする。

「……ああさよか、変態ホイホイできて結構なこつちやな」

「借りてていいの？」

「くれたつたんや。うちにぎょうさんあるさかい、いらん氣イ回すな」

「すげー、本当に拌み屋なんだ」

「俺ちやうで、ババア」

「口悪ツ」

どちらからともなく吹き出す。

取っ付き難いイメージがあつたが、笑顔は年相応にやんちゃで可愛かつた。

「なあ……カラオケ寄つてかねエ？」

俺の提案に茶倉は微妙な顔。やつぱ駄目か、と落胆する。

「ごめん忘れて。2組のヤツが言つてた、歌嫌いなんだろ」

「いや……」

「無理すんな。ジャイアンも卒倒して海馬が逃げ出すレベルのエグい音痴とか、人には向き不向きがあるもんな」

せっかくさらつてきたのに帰しちまうのが惜しくて……いや、本音を言えばもつとコイツの事が知りたくて誘つてみたのだが考えが足らなかつたと反省。

しゅんとする俺に詰め寄り、これまで見た中で一番険しい表情になった茶倉が念を押す。

「絶対笑わんつて約束せえよ？」

「笑うなやブチ殺すぞ」

「ごめ、ひー、ごめん、だってさーギャップがえぐいもんよ！ 般若心経が十八番とかさすが拝み屋の孫！ てつきりすげー音痴じゃないかってヒヤヒヤしてたのに余裕で予想の斜め上行くんだもんな、笑わずにいられつかよあははははは！」

腹を抱えて笑い転げる俺に茶倉は苦い顔だ。笑いすぎて涙まで出てきた。てか、コイツ全然面白いヤツじゃん。

2組の連中は敬遠しているが、実際の所茶倉は般若心経しか歌えないのに気後れし、同級生の誘いを断っただけなのだ。付き合ってみりや割と面白いのに、愉快な本性を知らないのはもったいねえ。

笑いの発作がおさまるのを待ち、ウーロン茶で喉を潤して話題を変える。

「さっきのおっさん何？ お前のばあちゃんのお客さん？」

「そんな感じ」

「金持ちっぽかったな」

「せやな」

他人事のようにあしらってストローの先端を囁む。達観した横顔は本心を読み取らせない。

続きを促すように凝視されバツが悪くなったか、渋々付け足す。

「うちにはババア鼻根の客がようけ訪ねてくる。その節穴の筆頭」

「ばあちゃん、すごい拝み屋なんだって？」

「クラスの連中に聞いたんか。お喋りやな」

「勝手に嗅ぎ回ったのは謝る。名前も言わず行っちゃうから……隣のクラスにいたんだな。俺の名前は」

「1年1組出席番号6番烏丸理一やろ。もー聞いた」

「さすが学年十位キープの記憶力」

「けったいな名前。親は京都出身？」

「どうしてわかるん」

「烏丸ゆーたら烏丸通りやん」

「親父が京都の出であつちにじいちゃんが」

「わかりやす」

「小3まで烏丸くわらまろって書いてたわ。で、あだ名が定着」

「焼き鳥屋かい」

「お前は関西出身？ 小5で越してきたって聞いたけど、にしちやあ訛りがぬけてないな」

「ほっとけ」

茶倉が気分を害す。今のは俺が無神経だった、反省。なんとなく気まづくなり、右手首の数珠をもてあそぶ。

「あのさ……なんでコレくれたんだ？」

「あそこは俺の心の洗濯場なんや。授業中にサバって煙草

喫うんが憩いなのに、個室であんあんされちや気が散つてもうてかなわん。数珠一本で黙らせられるなら安いもんや」期待してた答えとはちよつと違つたが大いに納得。耳まで火照らせて俯き、さらに踏み込む。

「俺に憑いてるの見えたのか。その、霊視つて意味だけど」

「まあな」

「どんなヤツ？」

茶倉にもらつた数珠を巻いてから黒い影に付き纏われることはなくなつたが、気になるものは気になる。効力が薄まればまた来ないとも限らない。少しでも情報が欲しくて食いがれば、茶倉がもつたいぶつて足を組み替える。

「新宿町二丁目のバリタチゲイで激しいプレイが好みのドS」

「聞きたくなかつた！」

ウーロン茶を吹き出して突つ伏す。

いや、ゲイだろうと覚悟はしていたのだが……実際犯されてる時にイメージが流れ込んできたし、悪霊が男なのは想像していたにしろ、二丁目のバリタチゲイつてパワーワードすぎない？ 盛大にむせる俺をよそに、茶倉がしれつと爆弾を投下する。

「おおかた新宿に行った帰りに拾ってきたんやろ」

「確かに……友達と映画見た日からだ。そっかーバリタチ

か。いやでもなんで俺だよノンケなのに、他にも靈感強えヤツいたじゃん！」

「自称靈感持ちちやうのソイツ。なんちやつて霊媒体質は霊かて見抜くで」

「そこまでは知らんけど」

「霊かて好みがある。生前の嗜好や性癖には引きずられるさかい、それを業つちゆうんや。お前に憑いとつたんは甘ちゃん未成年をガツガツ犯すのが大好きなヤリチンやつたんや」

「俺の顔と体がたまたまタイプだつたつてこと？ 全くもつて嬉しくねえ、せめて痴女の霊ならよかった」

「自分が可愛いならその数珠は当分はずさんこつちや」

「これしてるとどうなるの」

「たとえるなら静電気のかたまり。ビリッとするんでさわられへん」

わかりやすいようなわかりにくいような……眉間に川の字を刻み、次の質問に移る。

「聞いてもいいか、茶倉」

「何や」

「なんでカラスの死骸持つてたの。マジで黒魔術の儀式してんの」

正直これが一番聞きたかつた。自分の貞操に関しちや最大

の危機は脱したし。茶倉の目がスツと据わり、表情が刃物みたいに冷たく冴える。

「知らん方がええで。好奇心はカラスも殺す」

そうだ、ここで引くと頭の片隅の理性が囁く。茶倉に関わるのはよせ、面倒ごとに巻き込まれるぞともうひとりの俺が止める。

なのに引き返さなかったのは、俺自身コイツに興味を抱き始めていたから。強烈に惹き付けられた、と言い換えてもいい。

旧校舍裏の対峙以来、ずっと考え続けていた。

あの時茶倉が発した一言は何かと唇の動きをあてはめ、先ほどある可能性に行き着いたのだ。

「『堪忍な』って言ったよな？」

茶倉はカラスの首をねじきる時、「堪忍な」と詫びたのだ。そんなヤツが好き好んで動物を虐待するはずない。

「何か事情があつて集めてるんだろ。教えてくれよ」

勢い余つて身を乗り出す。ミラーボールが緩慢に回り、魚鱗のような銀の光が床や体を斑に染めていく。

「俺の推理だけど、多分お前、カラスを安楽死させてやつてたんだよな」

首が折れてもまだ息のあるカラス。放置は苦しみを長引かせるだけ。だから茶倉は自らの手を汚し、葬つたのでは？

他の誰もやりたがらない汚れ仕事を率先して、それで気味悪がられてるなんて理不尽だ。できることなら誤解をといてやりたい。

熱っぽい説得を鼻で一蹴し、だらけきつた姿勢でソファーに居直る茶倉。

「なんで構うん」

「借りを返したい」

心からの本音を訴えた所、茶倉は一瞬目を見張つてクツクツ笑いだす。やがて笑い声は高まり、カラオケルームの天井一杯に広がっていく。

十秒後、自暴自棄な笑いをスツと引つ込めた茶倉が前髪をかきあげて振り向く。目には侮蔑の色。

「ホンツマめんどい……先客なんぞシカトして行けばよかったわ」

「数珠のレンタル料代わりにお前がやってること手伝いたいんだ。駄目？」

「パシリにされたいん？ ドMやん」

「じゃない。えーと、友達っぽいのに」

後から思い出してもこつぱずかしい。

でもあの時は本気だった。カラオケ一発目に般若心経を熱唱するような変わり者がダチにいたら、俺の平凡な毎日もちよつとだけ楽しくなつて、刺激が生まれる予感があったの

だ。

茶倉の目の色が侮蔑から呆れに取って代わり、長いため息が突いて出る。

「俺が調べてるんはうちの高校が『鳥葬学園』て呼ばれるようになったからくりや」

密室と化したカラオケルームにて、五指の先端を合わせた茶倉がもったいぶって話し出す。

「鳥丸はうちの高校が鳥葬学園って呼ばれとるわけ知ってるか？」

「鳥の自殺がめちゃくちゃ多いから」

「せや。鳥がひとりでに死ぬ場所だから鳥葬」

「縁起でもねえ名前だよな」

俺が今春入学した篠塚高校は市の北東に位置する小高い丘の上にあり、運動部が強豪そろいなことと設備が充実していることで知られている。

偏差値はそこで受験人気も中の上を維持してるが、唯一にして最大の汚点として鳥の衝突事故が絶えないことが挙げられる。

在校生なら一度は鳥の衝突死を目撃するといわれる頻度で事故が相次ぐ為、気味悪がって第一志望を避けるヤツも多い。

反面、神経が図太くて気にしないヤツもいる。俺は間違はなく後者なわけだが、それはそれとして自分が通ってる学校で鳥が大量に死ぬのは気持ちのいいもんじゃない。

高校に上がって三か月。あんまり頻繁に事故が起きるからクラスメイトはすっかり慣れちまって、教室のガラスが壊んでもうるさげに眉をひそめるだけ。日常と非日常がすり替わって、みんな麻痺しちまってるのだ。

「ところでお前、なんで鳥がガラスにゴツンするか知ってる？」

「鳥目だから？」

「正解は鏡面効果」
ミラーリング

「何それ」

「摩天楼を思い浮かべい。全面ガラス張りの高層ビルは周りの風景を映し込む。で、鳥はまだ空が続いてる思い込んで突っ込んでくるんや。アメリカじゃコイツが原因で年間1500羽が死んだる」

「そんなに？」

驚いて声が上擦る。

「日本でも鳥の衝突死は増えとって、特に9月・10月に集中しとるそうや。逆に鳥が営巣して縄張り意識が高まる6月前後は事故が減るらしい」

「今は時期外れってことか」

実に物知りだ。拝み屋の孫が披露した知識にのんきに感心していたら、冷静な声で水をさされた。

「ところがどっこい、篠塚高校は例外。一年中鳥が死にに来る。これまで出とる死骸は異常な数や。しかもそれが五十年前の創立以来ずーっと続いとる」

呪いみたいに。

最後に付け加えられた一言に悪寒が駆け抜け、ぬるくなつたウーロン茶をちびりと啜る。

茶倉は淡々と話す。

「うちの校舎は普通の鉄筋コンクリート製で、鏡面効果と結び付ける根拠もたらん。三か月通つてけつたいに思わなかった？　いくらなんでも用務員の入れ替わり激しすぎや、よその高校と比べて教員もすぐ辞めはるし」

言われてみれば……先週までいた用務員のおっさんを見かけなくなつた。一身上の都合で退職していく先生も多い。

「そういうや4組のよつし……吉沢先生も鬱になつて辞めちまつたな、入学式で挨拶した時は元気だつたのに」

吉沢先生は大学を卒業してすぐ篠塚高校に着任した数学教師だ。年齢は二十代前半とまだ若く健康で、鬱とは無縁に見えたのに。

人が見かけによらないのは重々承知だ。表面上は明るく振る舞つて、実は深刻な悩みを抱えてるケースもある。

しかし吉沢先生や用務員の場合は前触れなく、ある日を境に突然消えちまつた。

産休や結婚ならめでたいが、うちの高校はどうもそういうのとは違つて、関係者が逃げるように去つていく。悪縁を断ち切ろうとでもしてるみたいに。

「考えてみりやおかしいよな、なんでうちの高校だけ？

丘の上に立つてんのが関係してんのか、鳥が目印にしてるとか」

「丘を切り崩したんは無関係とちゃうやろな。気になるんは方位や」

「北東……鬼門？」

「賢いなあ、知つとたん？」

見直されてドヤる。いや、よく考えれば小馬鹿にされた？「漫画で読んだことある。風水じゃ北東から悪いもんが入つてくるつていわれて、北東は鬼がいる方角、鬼門つて呼ばれたんだろ。けどなんでお前が鳥の大量死調べてんだよ、誰かに頼まれたのか。もしくは拝み屋の孫の使命感か正義感か」

「ポランテアなんぞようせんわ、アホらし。いうたらせやな、腕試しかな」

茶倉の左手の数珠が、ミラーボールがまき散らす鋭角の光を反射する。

「意味不明」

首を傾げてウーロン茶を飲み干す俺に向かい、片頬笑む茶倉。ギラ付く眼光が危険な色香を孕む、好戦的な笑顔にぞくりとする。

「俺がどれだけ強くなったか『わからず』為に、ちようどええ叩き台さがしとったんや」

「わからすって誰に？ 悪霊に？ ということは……うちの高校って何かいんの？」

「俺の勘やとヤバいのがおる」

メロンソーダを飲み干し、用済みになったストローを指揮棒のように振り回して茶倉がうそづく。

「何日か前に吉沢と元用務員に会った。で、話を聞いた」

「どうやって家を掴んだ？」

「ツテを頼った。詳しくは企業秘密」

吉沢先生は野球部の顧問をしており、その日は帰りが遅くなったらしい。真つ暗闇に包まれた校舎をひとり歩いていった彼は、廊下の真ん中に立ち塞がる鳥居を見て、中心に生じた渦から湧き上がる恐ろしい断末魔を聞いたと証言した。用務員の方も巡回中に鳥の自殺連鎖と謎の鳥居を目撃し、

「この学校は呪われている」と震え上がったそうだ。翌日に自主退職したとしても責められまい。

茶倉の目が昏い影を孕んで俺を見据える。

「ガラスにうつかりゴツンする鳥がおるんは否定せん。せやけど毎日となるとでつかい意志を感じんか」

剣呑な眼光に気圧され、ごくりと生唾を飲む。遙か昔から学園に巢食い、鳥の群れを招いて屠るおぞましいなにか。校舎内に鳥居を召喚し、贄の魂を吸い込むばけもの。

「まるで生贄だな。自分から進んで命を散らしに来る」

ましてや用務員の時は窓ガラスに順に突撃してきた。遠い方から近付いてきたというのが本当なら何かの脅しや警告ともとれる、鳥居の出現と結び付けて考えるのが妥当だ。

シャツの下で鳥肌立った二の腕をこすって眩けば、茶倉がさらに雑字を教えてくれた。

「そもそも鳥葬ゆーんは昔の弔い方や。死体を野ざらしにして鳥に食わせる」

「うわグロ」

「宗教上は遺体の魂を天に送り届ける意義がある。チベツトじやまだやつとるみたいやな。その際は解体師って人らが鳥葬台に移動して、動物が食べやすいように肉を削ぐらしい」

「うへえ」

あんまり想像したくねえ。俺の辟易した表情を愉快げに一

贅、わざわざ手振りまで添えた茶倉が食えない笑顔で付け足す。

「日本じゃ鳥葬が主流やけど、中国じゃ天葬って呼ぶ。魂が抜けた肉を他の生き物に布施するつちゅー観点からは一概に忌避でせん」

「日本じゃやってないんだろ？」

「刑法190条の死体損壊罪にあたるからな。せやけど似たのはあった。沖縄じゃ風葬いうて、やつぱり死体を野ざらしにして腐るまで放置するんや。肉が落ちた骨は海で洗い淨めて墓に納める、この手順が洗骨。インドネシアじゃ風葬で葬られた故人の魂は神になるって信じられとる」

「じゃあ罰当たりでもねえのか」

「中世は獸葬も行われた。文字通り獸に食わせて弔うやり方で、中には当然鳥も含まれとったから鳥葬と同一視してええ。広義の鳥葬は日本各地で行われとったつちゅーんが俺の見立てや」

「思い出した。化野、鳥部野、蓮台野は京都の三大風葬地って呼ばれてるんだ」

「野ざらしの『野』が付いとるんがその名残や」

嘗て日本には風葬にされた人たちがたくさんいた。彼等の遺体は墓すら作ってもらえず、鳥や獸に食われて自然に帰ったのだ。

しかし茶倉はばつさり切り捨てる。

「自然に帰すだの天に送り届けるだのは綺麗な建前で、貧乏人だから捨てられたつちゅーんが正しい」

「えっ、そうなの？」

「貴人は大がかりな葬儀して立派な墓に入れてもろるのが証拠。職業に貴賤なしなんて大嘘や、現実には弔いにも貴賤がある」

茶倉の口角がしたたかな弧を描く。結構皮肉屋で厭世家だよな、コイツ……友達いないのに納得。

ある可能性が閃いて片手を立てる。

「待てよ待て待て。つてことは、うちの高校も風葬地に建ってたなり？ 丘の上とかいかにもじゃん」

「今調べるとこ。古い話なんでなかなか資料が集まらない」
そっけなく肩を竦める茶倉に落胆半分安堵半分、妙な気持ちになる。いくら俺が図太いとはいえ、風葬の跡地で勉強するのはぞっとしない。そういうところって多分、化野みたいに石塔建てて祀らなきゃだめだろう？

「話聞いてもまだ信じらんねえ……うちの学校がんな危険なトコだったなんて。もし茶倉の言うことがホントなら敷地に祠とか神社とかなきゃおかしくねーか」

「疑うんか？」

「あ、いや、お前の力？ つてのは信じるよ、数珠のおか

げで悪霊撃退できてマジ助かったし！ でもホントにそんな鳥が死んでるならニュースになるはずじゃん、今はSNSであつというまに広がるし」

「学校が醜聞嫌って隠蔽しとる」

「陰謀論かよ」

ちよつと笑つてしまった。茶倉の話だけじゃ説得力が弱い。多少引き気味の俺の半笑いを冷ややかに眺め、拝み屋の孫が指摘する。

「ほなら聞くけど、なんでお前の霊姦体質が目覚めたんや」

「え……」

「篠塚高に入るまではピンピンしとったんやろ。偶然か？」

「篠塚高の悪い気にあてられて覚醒したってか？」

「忌み地つちゅーんはあるんやで、実際」

茶倉の説をよくよく反芻する。確かに、篠塚高に上がるまでは変な夢を見たことなかった。

「念のために聞くけどな、烏丸……お前が見たのつて黒い影にやられる夢だけか」

真剣な表情で詰め寄られて動揺する。

直後に脳裏に浮かんだのは乱れ飛ぶカラスのイメージ。俺はどこかだっ広い場所に仰向けて、カラスの群れの乱舞を見上げてる。

視界に降り注ぐ黒い羽根。潰れた鳴き声。手足は何故か動

かない。

「……ッ……」

「顔色悪いで」

「大丈夫……お前に言われて初めて思い出した。前にも悪夢っぽいの見てたよ」

「具体的に」

「丘の上を飛ぶカラスの夢」

なんで今の今まで忘れてた？ 不可解だ。悪霊にレイプされたショックがでかすぎて忘れてたのか……強姦の記憶で上書きされちゃったのか。

覚えてる限りの夢の内容をしどろもどろ説明した所、烏丸は納得した表情で引き下がる。

「見始めたのが4月頃。入学した直後からとすると筋が通る」

「かなり前から目覚めてたんだな」

カラスの夢は霊姦体質が本格的に覚醒する前兆だった。ところがアホな俺は全く完全に忘れていた、今の今まで見事にスルーしていた。

だってただカラスが飛んでるだけで、他に何も起こらないのだ。人に話した所で「ふーん」と無関心に流されるのがオチじゃないか。

「友達作ったり勉強追い付くのに忙しかったし、しょぼい

夢まで気が回らねーっての」

「一生懸命クラスに馴染む努力して偉い偉い、花丸くれたる」

クラスに馴染む努力を全放棄してる茶倉がまるで心のこもらない拍手を送ってよこし、怒りに震える拳を握りこむ。今回ハッキリしたのは、篠塚高校が鳥葬学園と呼ばれる裏に何かあること。

教員や用務員の入れ替わりが激しいのは、彼等が夜の校舎で鳥の連鎖自殺と黒い鳥居を目撃したから。

俺の霊姦体質は4月時点で目覚めており、それには鳥葬学園の秘密が関係している。

そして茶倉練は、「腕だめし」が目的で鳥葬学園に潜むなにかに戦いを挑もうとしている。

「……………」

頭のとつぺんから爪先まで、目の前の男を値踏みする。

吉沢先生と用務員の退職理由を知る為に茶倉が頼ったツテとか、まだ気になることはたくさんある。とはいえコイツの性格上、突っ込んで話してくれない気がした。

謎多き拝み屋の孫を感慨深く眺めているうち、茶倉の視線が右手首に移っていく。

「殆ど真つ黒やな」

「思ったより早い」と呟いて、おもむろに俺の右手首をひつ

たくる。

「汚したんじゃねえよ、勝手に濁っちまったんだ。風呂場で擦ったんだけど全然落ちねえ、洗剤使ったほうがいいかな」

「どこの世界に数珠を洗剤に漬けるアホがおる。ああいたな目の前に」

「まだしてねえし。未遂だし」

無然と口を尖らす俺の右手首を裏返しては表返し、一粒一粒の濁りを仔細に点検し終えた茶倉が、神妙な面持ちで告げる。

「はよせな手遅れになる」

「何するんだ？ お祓いか？ 手遅れってなんだよおい！」意味深に言葉を切られ、どす黒い不安が胸を蝕んでいく。

「うわっ!？」

物凄い剣幕で茶倉の肩を掴みかかるや、即座に足を払われた。

「いててて……」

ミラーボールの光が移り行く天井が視界を占める。背中からソファーに倒れ込んだ俺の胴に跨り、茶倉が嫣然とほくそえむ。

「お前がどうしてもってねだるなら除霊したつてもええで」

「本当か!？」

「た・だ・し」

茶倉が俺の学ランの一番上のボタンに手をかけ、プチリと外す。外気に晒された鎖骨をしなやかな人さし指でなぞられ、官能に震える。

「途中で『待った』はきかん。覚悟せえよ」

茶倉の手でソファーに寝かされる。

「茶倉待て、除霊って」

「せやから心霊治療や。知らんのか」

「知らんがな！」

関西弁が伝染った。脊髓反射で全力ツツコミする俺の上に跨り、茶倉が面倒くさそうに肩を回す。

「言い忘れとった。お前の霊姦体質な、貸した数珠はめとれば解決するつちゅーもんでもないで」

「そうなの？ やっぱちゃんとした所でお祓いしなきゃ駄目？」

「こんなん気休め。応急処置。対症療法」

茶倉が面白そうに笑って俺の右手の数珠を突付き、至近距離で覗き込んでくる。目と鼻の先の端正な顔と、茶色がかった不思議な虹彩の色に魅入られる。

「お前の場合フツーに歩いてるだけで霊を引き付ける。今

は数珠で予防しとるけど、霊は撃退できても瘴気を吸い上げるんは止められん」

「瘴気って」

「病や厄を運んでくる邪悪な気。昔はコイツが病気の原因って信じられとった、医療が発展した今は迷信扱い。拝み屋の間じや悪霊が発する負のオーラつちゅーのが共通認識、感染してもたら体調や心の安定欠いて不幸になる」

「真つ黒になる前に手を打たなきゃまずいってこと？」

俺が今してる数珠に瘴気が蓄積されてるのはわかった。リセットしなきゃ色々まずいのも痛感した。でもどうやって？ 疑問符を浮かべた瞳で上目遣いにかがえば、茶倉が挑発的に唇をなめる。

「瘴気は体ん中にたまるさかい、それを上手いこと出したれば解決」

「なるほどね……で、何で押し倒す訳？」

「童貞か？」

「ッ！」

ストレートな質問に赤面、返答に詰まる。茶倉の手が頬を包み、そこから滑り落ちて緩やかに首筋をさすりだす。

今まで誰にもされたことない淫靡な触り方で、皮膚の下の熾火をかきたてるように、未知の感覚を煽り立てる。

「『エンティティく霊体く』て映画見たことあるか」

「ないけど……」

「アレは実話をもとにしたフィクションや。1970年代、ロサンゼルスに実在のシングルマザーが夜毎ポルターガイストにレイプされ続けた。お前と同じで犯人は肉体のない霊体……即ち悪霊」

「どうなったんだその人。助かったのか」

「ネタバレはせんといたる。ともあれ、シングルマザーはエクソシストを頼ったんや。餅は餅屋、幽霊は霊媒師っちゅー理屈。欧米じゃ悪魔による強姦はようおきとつたらしい、女も男も手あたり構わずちゅーからおさかんやで」

「！ ツ、ぐ」

茶倉の手がボタンを外し、学ランをはだけて素肌をまさぐる。ヒンヤリした手が薄い胸板にあたり、生理的嫌悪で喉が仰け反る。

「やめ、ああつ」

「中から穢されてもたら中に入らな浄化できん」

暴れた拍子にソファアが軋んで転げ落ちそうになる。茶倉に触れられた途端力が吸い取られて、抵抗の意志が急激に萎んでいく。

「よせよ茶倉くすぐった、あつぷ」

ソファアを掻いて必死に逃げる俺の腕を掴んで固定したかと思いきや、右の鎖骨の上、薄い皮膚にくるまれた突起を

吸い立てる。

何がどうなってんだ？ 俺、茶倉に犯されんの？ 漸く悪霊に強姦される悪夢から解放されたかと安心したのも束の間、次は拝み屋の孫にケツを狙われるなんて……。

「感度は上々。開発され済みか」
 瞼の裏が真つ赤に燃え上がる。

「どけ！」

怒りに任せて右手を振り抜き、茶倉の頬を張り飛ばす。やつちまった。手のひらがじんじん痺れる。人を殴るのなんてダチとじやれる以外じゃ初めてかも……疼く手を庇ってあわずさ、おそろおそろ声をかけた。

「大丈夫か？ ごめん、わざとじゃねえんだ。お前が変なことするからパニクって、その」

「あーあー別にかまへんよ。気にすな」

茶倉があつさり両手を挙げて受け流す。整った顔にチラ付く軽薄な薄笑い。

ソファアの端に寄って呆然とする俺をよそに、さつさと帰り支度を始める。

「カラオケ代は割勘でええ？」

「茶倉……おい？」

「何ぼけつとしとんねん、帰るで」

「だってまだ除霊が」

「しとうないんやろ？　ならしやあない、悪霊とずこぼこ
 楽しめ」

学生靴を担いだ茶倉に選択を委ねられ、肘掛に乗り上げた
 まま葛藤する。

茶倉はドアに手をかけたまま、体半分だけこつち向けてる。
 目には冷ややかな色。今ここで断つたら、本当に帰つちま
 うんだらうなと思つた。

「！　痛ツ、」

右手首に圧が加わる。小さく呻いて見下ろせば、全部の数
 珠が真つ黒に濁ってるのに息を呑む。しかもひとりでにギ
 チギチ食い込んできて、皮膚の色が変わり始めている。

「あ……」

今、コイツに見捨てられたらどうなる？

また悪夢の日々に逆戻り？　金縛りで手も足も出ず、成す
 術なく悪霊に犯され続ける夜が再開するのか？

嫌だ、まっぴらごめんだ。漸く安心して眠れるようになった

たと喜んだのに、また……

うなじに生臭く生温かい息を感じる。何かが後ろにいるの
 が振り向かなくてもわかる。不可視の手が足に絡み付いて、
 下半身から上半身へ這い上つてこようとしてる。

「お前にまかせたら、ちゃんと追っ払えるんだよな」

「せやな」

「数珠をキレイにしてくれるんだよな？」

「かもな」

茶倉がおぎなりに頷いてドアにもたれる。俺は小刻みに震
 える手でボタンを一番下まで外し、足元にズボンとシャツ
 を脱ぎ落とす。

「じゃあ、してくれ」

「言葉遣いになつてない。やり直し」

「つ……お願いします、除霊してください」

今見捨てられるのが一番怖い、今の俺には茶倉しか頼れる
 人間がない。

怒りと屈辱に拳を握りこんで繰り返せば、茶倉がだるそう
 な足取りで戻ってきた。

緊張に引き攣る顔で一挙手一投足を見守る俺をよそに、ソ
 ファーに踏ん反り返つて顎をしゃくる。

「跪け」

大人しく言われた通りにする。

「ジッパ―下ろせ」

「俺が？」

「不満か」

「やるよ」

情けなく震える声で応じ、ためらいがちにズボンのジッパ―
 を下ろす。

「自分で出して唾をかけろ」

「これ……除霊に関係あんのかよ」

「やつとちゃんと後がキツツイで」

その言葉の意味を深くは考えないようにして、ぎこちない手付きで茶倉の下着を寛げ、萎えたペニスを掴みだす。

「嫌な顔すな、自分のはしょっちゅうさわつとるやろ」

「ふにやつとして気持ち悪い……次はどうしたら」

「手のひらに唾たらしめて、ぬるぬるを塗してしごけ」

仕方なく言われた通りにする。口腔に湧いた唾液を右手のひらで受け、それを伸ばして広げたのち、茶倉の竿に塗してにゆるにゆる捏ね回す。嫌悪感と不快感で吐きそうだった。

「ッ、ふ、く」

かすかな呻き声に顔を上げりや、股を開いた茶倉が小さく喘いでいた。気持ちいい……のだろうか。眉間に寄った皺と上気した頬がいやに色つぼく、嗜虐心が刺激された。

「なに見とんねん。殺すぞ」

三白眼で凄まれ、慌てて奉仕に戻る。

ペニスをいじられて呻く茶倉の痴態を目の当たりにし、ズボンの前がキツくなっていた。赤い亀頭を指でこすり、段の部分締めを離し、敏感な裏筋をくすぐる。

俺より太くて長くてご立派で、ちよつとだけやけちまった。「来い」

突然腕を掴まれた。ペニスはすっかり大きく育ち、いやらしくパク付く鈴口が汁を垂れ流す。

カウパールの濁流に塗れたペニス、ソファに仰向けた尻の窄まりにあてがわれる。

「たんま茶倉、そこっ生はまだ挿れたことなつ、あつ」

「悪霊にぶちこまれたんやろ」

「待つてホント心の準備が……絶対裂けるよ痛えに決まってる、他の除霊の仕方はねえのかよ」

往生際悪く暴れる俺を組み敷いた茶倉が、胸板の突起を強く抓る。

「ひゃんっ!？」

「生娘みたいにピンクでめんこい色しとる」

茶倉に摘ままれた瞬間ビリツときた。体がどうかしちまつたみたいだ。

俺の反応に気を良くした茶倉が、固くしこった乳首をコリコリといじめ出す。根元を搾り立て、先端を軽くひっかけ、じらしてじらしてじらしまくる。

「ユーレイにもさわらせたん、ここ」

「動けなかったんだからどうしようもねえだろ、ああつ、んっふ、茶倉っや、揉む、な、やだ」

「また膨らんだ。完全にクリトリスやん」
死ぬほど恥ずかしくて嫌なのに気持ちよくて、もつとして

ほしくてたまらない。気付けば涎をたらして喘ぎまくり、ぎしぎしソファを軋ませていた。茶倉はとんでもない性悪だ。乳首責めに夢中になって前はほつたらかし、こなたケツにも入れてくれねえ。

「ちやくつ、ンうつ、もつやめ、はあつ、乳首すごつ気持ちいつ、いつちや、乳首でイッちやうからつ、許してお願
い」

わけもわからず縄り付き、涙目で懇願する俺を傲然と見下ろし、茶倉が右手の数珠を外す。

「この程度で昇天すな」

「~~~~~ああつ!!」

ビクンと体のはねた。茶倉が限界まで尖りきった乳首の上で、数珠を転がしたからだ。俺が仰け反り喘ぐごと、冷たく固い数珠の玉が勃ちまくった突起を揉み潰す。

「やあつチャクラそれ無理っ、ああつ感じすぎてやばっ、数珠気持ちいついつちや、乳首もつとコリコリしてえっ」
ねちっこい前戯を続けるうちに体温が伝染って数珠がぬるくなる。

「ッは、はあ」

汗みずくでよがる最中、確かに見た。乳首や毛穴から漏れた黒い霧が、茶倉が手繰る数珠に吸い込まれていく。ギリギリまで感度を高めた乳首を数珠で刺激することで生じた

快感は強すぎ、下着の内側でそそりたつたペニスが我慢汁を垂れ流す。

「パンツに恥ずかしいシミできとるで。まさか漏らしたんか、さわつとらんのにド淫乱やん」

乳首責めに飽きた右手が数珠を巻き付けたまま下に移動、パンツの中へもぐりこむ。

「~~~~~ッ」

固くなったペニスをプツリと数珠が圧し、コリコリと擦り立てる。

陰唇のようにパク付いて大量のカウパーを分泌する鈴口の上を、いやらしくテカリぬめる裏筋を、数珠を巻いた茶倉の手が自由自在に這い回り俺を追いつけてく。

「茶倉、ッ、それやめて、もたなつ、ああつ、感じすぎておかしつ、あつ、頭へんつ、で、ちんこコリコリされて気持ちいつ、あつ、あつ、ああつあ」

「数珠がぬるぬるで滑つてもた」

俺は見た、ペニスから噴き出た黒い霧が数珠に吸い上げられていくのを。本当に除霊なんだ。日な事じゃねえなら恥ずかしいよな。

朦朧とする頭で考えてた時、テーブルのにつかつたスマホがいきなり震え出した。

ドS全開で数珠プレイをしていた茶倉が固まる。

「……お前のじゃねえの?」

スマホのバイブは止まらない。ブーブーと震え続けている。興ざめして指さす俺の上で、茶倉は完全に止まってしまった。

だんまりを続ける拝み屋の孫をよそに液晶を一瞥、表示された名前に目を見開く。

『ババア』

「お祖母さん?」

帰ってこない孫を心配して? ひよつとして門限とかあつたんだろうか。直後に通信拒否した茶倉が、俺の脚を無理矢理こじ開ける。

「いくで」

切れたスマホをカーペットに投げ、ずるりとベニスを押し込む。

俺が出したのと茶倉が出したの、二人分のカウパーが潤滑剤代わりを果たした挿入は思いがけずあっけない。

「ふああつあ、ああつあ」

頭ん中が爆発して真っ白になる。脊髄から脳天へ、抽送に合わせて駆け抜ける刺激に翻弄され喘ぎまくる。

「ちやく、らつ、これ怖いっ、んなの初めてっ、あつ、か

らだへんっ、お前のすごつでかくて、ああつあ、やあつそこ変っ、奥突くとすごいくるっ、ぞくぞく止まんなっ、あつあ」

「悪霊とどっちがええ?」

「お前っ、の、生ちんこ、もつとケツパンパンして、あはっすげっ」

俺にガツガツ突っ込む間も茶倉は手を止めず、首や胸や腹や股で数珠を転がして刺激を加える。それがくすぐったくて気持ちよくて全身が性感帯に作り替えられて、欲張りなケツがイチモツを食い締める。

「もつと奥まで除霊してっ、俺ん中に入ってるモヤモヤ追い出してっ!」

「ッ、んなキツくしたらすぐ出てまうやろ」

俺の全身から噴き出した黒い霧が天井に渦を巻いて蟠り、茶倉の数珠に収束していく。腰を振りたくりながらふと見れば、右手に巻いた数珠は元の色に戻っていた。

ところが……

ぐぎやあぐぎやあぐぎやあ。

ブツンと回線が入り、鼓膜が割れる大音量でカラスの鳴き声が轟いた。